

保 育

集団で育ち合うことを支える環境・援助

森 脇 有 紀

1 はじめに

本研究は、5歳児が自己を表現しながら、相手の思いを考え、受け入れていくことを通して、集団で育ち合うことを支える教師の環境・援助を探ることを目的とする。

少子化や核家族化、人間関係の希薄化など、幼児をとりまく環境の変化により、様々な体験の機会が減少している。そのため、幼稚園が初めての集団生活となる幼児も少なくない。幼稚園教育要領解説(2008)には、幼稚園は同年代の幼児との集団生活を営む場であり「家庭や地域において幼児が兄弟姉妹や近隣の幼児とかかわる機会が減少していることを踏まえ、幼稚園において、同年齢や異年齢の幼児同士が相互にかかわり合い、生活することの意義は大きい」¹⁾と明記されている。

実際に5歳児の子どもたちは日々、友だちとのかかわりの中で自己を表現し、楽しみを見出したり、ときには互いの思いがぶつかり葛藤したりしている。このように、クラスの友だちとかかわる中でいろいろな感情を体験している。また、5歳児にもなると自分のしたいことをすることももちろんだが、友だちと一緒に遊ぶ楽しみを感じ、友だちと共に同じ遊びを楽しむ姿が多くなっている。反面、仲のよい友だちの前ではのびのびと自己を表現しているが、クラスになると自分の思いを表現することに躊躇し、一步引いている幼児もいる。また、仲の良い友だちに対しては積極的にかかわるが、他の友だちに対してあまり関心がなく、状況を気にしない姿も見られる。例えば、仲の良い友だちが困っていると声をかけ助けるが、そうでない相手だと声をかけるもの様子を聞いて満足し、何かをしようとはしない姿があり、筆者は寂

しさを感じている。

森上(1997)は、「集団ははじめから存在しているものではありません。クラスを編成したとかグループを作ったといっても、大勢が集まっても、それは群れに過ぎません。(中略)“なつとう集団”では、一粒一粒の豆が生きており、糸を引き合う関係が作られていきます。この関係がどう育っていくかを詳細に捉えることが必要」²⁾であると述べている。確かに、同じクラスになったからといって子どもたちの間にクラスの仲間という意識やかかわり合いが生まれるわけではない。しかし、同じクラスになったからこそ自分を大切にしながら友だちのことも気かけ、自己を表現しながら育ち合ったいという願いを持った。そこで、本研究では対象とする集団を同じクラスの仲間たちととらえ、集団で育ち合うことを支える教師の環境・援助を探っていくこととする。

2 集団で育ち合うとは

それでは、集団で育ち合うとはどのようなことであろうか。森上(1997)はさらに、集団とは単なる枠組みのことではない。集団で育つということは、単なるクラスという枠組にはまることなく、“個”それぞれが尊重されながら、“個”が孤立することなく友達とつながり、影響し合っていることで、「一人ひとりを生かし」ながら、「集団で育ち合う」と述べている³⁾。また、末永(1957)は集団について「広い意味では、生活体の集まりをすべて集団という。(中略)心理学、社会学ではしかし、成員間になんらかの機能的な相互関係が認められるようなばあいをとくに集団とよぶことが多い」⁴⁾と述べている。これらのことから、

集団とは集団の中に存在している“個”が互いに機能的な相互関係、ここでは“個”を大切にしながら友だちとのかかわりがうまれ影響し合うことで集団として育ち合っていくと考えられる。“個”が大切にされることで友だちを気にかけ、かかわりがうまれることで集団の一員としての自覚をもつようになる。また、集団としての一員をもつことで、さらに友だちとのかかわりが生まれていく。

以上のことから、集団で育ち合うには“個”が大切にされながら、友だちを気にかけ互いに影響をし合うことが必要である。そこで本研究では“個”をのびのびと表現しながら、相手の思いに気づき受け入れる中で集団で育ち合うととらえ、5歳児が自己を表現しながら、相手の思いを考え、受け入れていくことを通して、集団で育ち合うことを支える教師の環境・援助を探ることを目的とする。

3 方法

(1) 対象児

年長組5歳児24名(男児11名 女児13名)

(2) 観察期間・場面

平成26年4月から11月

好きな遊び・まとまった活動の時間より、友だちと自己を表現しながら、相手の思いを考え、受け入れようとしている場面の事例を抜き出す。

(3) 検討方法

自己を表現しながら、相手の思いを考え、受け入れようとしている場面の事例の記録を考察し、教師のかかわりが適切であったかを明らかにする。また、集団で育ち合うためのよりよいかかわりについて検討する。

4 実践事例

実践例1 「もう、待ってるのに」(4月)

<背景>

進級し、子どもたちは大きい組になった喜びと期待感でいっぱいである。H男とW男も大きい

組になった喜びはあるが、不安も強い様子である。好きな遊びの時間が片付けになると、ふらっとでかけ、保育室に帰ってこない日が続いている。

①「先生、いつもおそいね」

大体の子どもが片付けを終え保育室に帰ってくる。教師も保育室に戻るがW男とH男の姿がない。教師が「みんな帰ってきたかな?」と声をかけると、M女が「WさんとHさん外にいたよ」と応える。「そうなの?どうしたのかな?」と教師が言うと、「さあ、Mにはわからない」と言って手洗いに行く。教師は「ちょっと呼んでくるね」と言い、W男とH男のところに行こうとする。すると、M女が「先生、いつもおそいね」と言い、「絵本よんどこつ」と絵本を読み始めた。

②「もう、待ってるのに」

W男とH男は築山の横でしゃがみこみ、土をいじっている。教師が「どうしたの?」と尋ねると、何も応えない。再度「どうしたの?知らん振りは悲しいな」と応えると、「もうこんとつてや。まだ遊びたいんじゃけ!」とW男。続いてH男も「H君らはもうちょっと遊ぶことにしたんよ」と言う。「そっかあ、もう少し遊びたいのか。そうだよねえ。でもどうしよう、お部屋でみんな待ってるよ?」という、「Wはまだ遊ぶんじゃけえ」とすねたように言う。

少しの間たわいもないやり取りをしているとだんだんW男とH男の表情がほぐれてくる。

「ちょっとみんながどうしてるか、近くまで行ってこっそり見てみようか」と提案すると、3人でこっそり見に行くことになった。保育室の近くに着くと、W男と年中組のときに同じクラスだったS男が「あー、そんなとこにいたん、W君!一緒に絵本読みたかったのに。」と言う。「え?待ってたん?」とW男が言うと、「当たり前じゃん、でもW君おらんけえ。何で帰ってこんの?」と声をかける。H男は「H君W君と

まだ遊びたかったんよ」と答える。近くにいたM女が、「もう、遊びたいのはわかるけど早く帰ってきてよ。待っているのですから！」と笑顔で言う。W男とH男は、少し驚いたような表情をしながら、「わかつとるわー！」と大きな声でいい、保育室に入っていく。



図1 虫を探すH男とW男

【考察】

①の考察

①では、教師が片付けをしてきた子どもたちに声をかけながら、W男とH男を迎えに行った。教師はW男とH男もそろって、という思いから迎えに行くのであるが、M女から「いつも遅いね」という言葉が出た。待っている子どもたちにとってはいつも待っている状況が続いていた。H男とW男という部屋に帰りたくない、と行動している思いも大切にしなければならないが、もっとクラスで待っている子どもたちの思いも大切にしなければならなかった。

②の考察

教師が迎えに行くと、W男とH男は少し嬉しそうにする。自分のことを見て欲しい、自分の思いをわかってほしいということの表現だと教師はとらえた。しかし、他の子どもの思いも知ってほしい、と待っている友だちがいることを伝えるがかたくなになってしまう。気分をほぐしながら保育室に帰ると、S男とM女の友だちの一言がある。これによって、W男とH男は「もっと遊びたい」という思いがありながらも、待っていてくれた友だちの思いを知り、自分が受け

入れられたと感じたと考える。受け入れられたことで、相手の思いも受け入れ、また相手の思いに気づききっかけにもなった。その次の日から、H男とW男は時間がかかるものの、少しずつ自分で帰ってくるようになった。このように、友だちに自分を受け入れてもらうことで、相手の思いに気づき受け入れられるようになり、少しずつクラスへの所属感が育ってくると考える。

実践例2 「うーん、でも…」(9月)

<背景>

Y男・T男・H男らが作ったおぼけや迷路を紹介し、クラスでのお化け屋敷づくりがはじまった。みんなで相談し、迷路・暗くする・お化けづくり・クイズの4つに分かれた。H男とY男は迷路チームにいたが、別々に迷路を作っていた。H男はA女と一緒に、ぎざぎざのトンネルを作っている。

H男はA女と「このへん？」と言いながら切る場所を相談している。するとY男が「Yもやらして」と入ってくる。H男が「いいよ」と言うと、Y男はおもむろにダンボールを切り始める。H男は自分が切るところに夢中で、Y男のほうを見ていない。教師が「Y君、そこ切ってもいいの？」と尋ねるとY男は「ここはね、穴開けてわって出ることにするから」と言う。A女が「待ってY君、そこは切らんよ」と気づいて声をかけると、Y男は「でもここ窓にせん？」と言う。A女が「H君、Y君が窓にしようって」と言うと、H男は「もう、勝手にせんってや！Hのなんじゃけん」と穴をあけたことに怒っている様子である。Y男は「手伝いたかったんよ、ごめんね。でもYここに窓したい」と言う。「だめ！絶対だめ」とH男が言うと、A女は少し困ったように「H君、Y君も一緒にやろうよ」と提案する。H男は「だってY君違うことするだけだめ」と言うとY男は「なんでそんなこと言うん」と悲しそうである。しばらく様子を見守ると、

H男は顔を背けY男は怒って涙が出そうである。教師が「Y君知らなかったから穴開けちゃってH君嫌だったんだね。Y君知ってたらそんなことするかな？」と言うと、A女が「せんのもんじゃない？」と言う。Y男が「Y知らなかったから穴開けてごめんね。Yも仲間に入れて」と言う。H男は怒った顔のままではあるが「もう、勝手にあけんとってや。やるなら言ってからにして」と焦ったように、だが少し気持ちが落ち着いて言う。Y男は「ありがとう」と言い「ここに窓作るね」と言う。H男は「じゃけ、そこは開けんのよ」と困ったように言うと、Y男は「でもここに穴開けて窓作らん？」ともう一度言う。H男は「あーもう、じゃけえ…」と言ってどう言っているかわからないのか黙ってしまう。教師が「H君もY君も考えがあるんだよね。聞いてみたら？もっと素敵なのになるかもよ」と言うと、A女が「Y君A知らないから教えて」とY男に尋ねる。Y男は少し嬉しそうに「ここここに窓作って、手を出しておどかすところにしようよ」と言うと、A女は「いいね。Aたちはぎざぎざにしようとしてたの」と話す。H男が「ここはぎざぎざ。窓いいんじゃけど、でも2個は多いような」と遠慮がちに言う。教師が「窓も恐そうだね。でも2個は多いと思うのか。どうしようか」と言う。Y男も少し考えて「じゃあ1個ならいい？」と再度たずねる。H男は「うーん、でも…。1個なら。そのかわり、めちゃくちゃ恐いの作る」と笑顔になる。Y男は「りょうかいっ」と敬礼し、3人でどんな穴を開けるか相談を始めた。



図2 迷路のトンネルづくり

【考察】

H男はぎざぎざのトンネルを作りたいという思いをもち、迷路づくりを進めていた。そこにY男がやってきて、思いと違うことをしたので、Y男に対して声を荒げていた。Y男も、H男たちと一緒に作りにきたが、自分の思いで遊びを進めようとしたため、お互いの思いがぶつかった。

様子を見守っていたが、互いに思いがぶつかった後で相手の思いに気づくことが難しい様子であった。そこでH男とY男それぞれが相手の思いに気づき自分で意識できるような言葉かけをした。

その後H男とY男は一緒にやることになったが、それぞれに思いは伝えていないままであった。そこで、Y男とH男が互いに考えを出し合い目的に向かって具体的にどうするか見通しがもてるように、思いを出し合えるように援助した。H男は穴を開けて欲しくない様子であったが、Y男の思いを聞き、考える様子が見られた。Y男も普段折り合いを付けることが難しいことがあるが、H男の様子や言葉から、一緒にできるように考えていた。

このように、それぞれが自分の思いをもちぶつかり、うまくいかない困難を、思いを伝え合い乗り越えたりしたことで、その後一緒に遊ぶ姿が見られた。自分の思いを押し通すだけでなく、我慢しながら互いに相手の思いを尊重し譲り合い、折り合いを付けていっていた。

実践例3 「きく組祭り」(11月)

<背景>

ケーキ屋さんをして遊んでいた子どもたちが、昨年度の経験からもっと大きなお祭りをしたいという思いをもち、みんなでお祭りづくり始めた。お客さんを3歳児に設定し、内緒で準備を進めていた。

①「そりゃあきく組の祭りじゃけんね！」

3歳児をお客として招待する当日、もう一度みんなが集まり、3歳児にどんなふうにして欲しいかを確認した。それぞれが「楽しい」「すごい

て思っただけ」など伝え合い、みんなで楽しい・喜び・びっくり・嬉しいの4つの気持ちになってもらいたいと考えた。「すごいね、そんなふうになってくれたら嬉しいね」と教師がにこにこしながら言うと、S男が「そりゃあきく組の祭りじゃけんね！今までみんなで作ったんじゃけ」という。それを聞いたY女も、「Y達もがんばったし、みんなもがんばってたから、当たり前だよ！」と笑顔で言う。

②「Sちゃんってすごいんよ」

お祭りが終わり、みんなでお祭りのときに困った事、嬉しかったことなどを伝え合った。S女が「わたしもケーキ作りたかったんだけど、もも組さんがやりたいっていったから（ゆずったら）場所がなくなっちゃったの。でも嬉しかった」と言う。それを聞いていたY男が「Sちゃんってすごいんよ、作ってるときも優しいんじゃけ」と言うと、A女も「Sちゃん優しいね、すごい」と言う。S女はとても照れた表情をしている。

【考察】

①の考察

お祭りづくりが始まる前に、全体でどんなお祭りにするか、何をやるかを考えた。その後、グループごとに何の素材を使ってどうやって作るかを相談した。そうすることで、グループに分かれた後もきく組全体としての目的を把握しながら、それぞれが役割を見出し参加することができた。

みんなで目的をもって作り上げていく過程の中で、“きく組”という意識が強くなっていったのがS男の言葉から伺える。同じ目的に向かって互いに思いを出し合いながら遊びを進めていく中で、集団としての仲間意識が強くなっていくのではないかと考える。

②の考察

いつもはみんなの前で言いにくいS女やY男も、一生懸命に取り組んでいたからだろう、みんなの前に出てきて思いを伝える姿があった。そこで、

「Sちゃん優しいね、すごい」という言葉が返ってきたことで、S女は受け入れられた喜びを感じていると考えられる。

また、困ったことをみんなで共有することで、次に向けてどうするかということを考える機会にもなっている。

5 実践を終えて

5歳児の子どもが集団で育ち合う体験をするためには、安心して自己を表現できる人間関係づくりや、受け止めてもらえる安心感を育むことが大切である。本研究の事例における集団で育ち合うことを支える教師の環境・援助について、以下の点が必要なのではないかと考える。

①自分の思いを安心してだせるような雰囲気づくり

実践例1では、W男とH男はなかなかクラスの生活の流れにのれないでいた。W男とH男の中にも葛藤があった。W男とH男のように、自分の思いを出せるためにはまず、教師と子どもとの間に安心できるような関係づくりが必要である。その上で、状況に応じて見守ったり、励ましたり、代弁したりすることで、思いを伝えるようになる。また、S男やM女のように、自分の思いを表現したことを受けとめてもらえる雰囲気があることで、安心して友だちにも思いを伝えるようになる。また、思いを受け入れてもらえることで自分も友だちの思いに気づくきっかけになっていたのではないかと考える。

②“集団の中の自分”を意識できるような教師のかかわり

実践例1では、M女の言葉から、教師は集団と個のそれぞれを大切にできていないのではないかと疑問を持った。W男やH男のことと、保育室で待っている子どもと両方をもっと大切にしなければならなかった。そのためには、W男とH男に友だちを意識できる機会が必要だったのではないだ

ろうか。S男の言葉により自分が受け入れられ、また相手の思いを受け入れられたことで、W男とH男はクラスに戻っていった。W男とH男の心の葛藤のことであるが、クラスの友だちみんなで考えていくことをしていれば、クラス全体としての育ち合いになったのではないだろうか。

このように、自分が集団の一員であることを自覚できるような教師のかかわりが必要である。

③伝えたい思いをもち、友だちとぶつかることを支える教師のかかわり

自分の思いを見つけ、また相手の思いを受け入れる体験を遊びの中でするためには、まず、やりたいことが見つかることが大切である。実践例2では、Y男とH男がそれぞれに遊びの目的をもつことで、伝えたい、譲れない思いが生まれぶつかり合っている。思いがぶつかる場面は同時に友だちの思いに気づく機会でもあると考える。どちらかが思いを伝えず引いてしまったり、友だちと共有しようとしたりしなければ友だちとの育ち合いはうまれないのではないだろうか。そのために、まず、自分の思いを伝えられるように見守ること、また友だちの思いに気づくきっかけとなるような言葉をかけることで、自分で考えられるようにする。そのうえで、必要に応じて間に入り思いをつないでいくことで、友だちと伝え合い、育ち合えるように援助することが大切であると考えます。

④友だちと一緒に役割を見出して遊び、満足感を味わえるような教師のかかわり

実践例3では、みんなで同じ目的に向かい遊びを作り上げていく中で、「きく組じゃけんね」というように、クラスとしての意識が高まっていると考えられる。5歳児では、遊びの中で膨らんだ思いや目的を周りの友だちと共有し、同じ目的に向かっていく中で、お互いに考えを出し合ったり、認め合ったりして、集団の中で個を発揮していくと考える。そのために、全体で思いを共有できる場を設定し、その中で友だちとの伝え合いや協力ができるように援助した。また、終わった後に思

いを伝え合う場を設けることで、S女のように友だちによさを認められる満足感を味わっている。これは、友だちの思いを受け入れ、そのうえで良さを見つけることができているからであると考えます。このように、友だちと役割をもって遊んでいく中で、伝え合いが生まれ、クラス全体としての意欲も高まっていくのではないかと考える。

6 終わりに

子ども自身が心動かす体験や夢中になって遊ぶ中で生まれる友だちとの伝え合いを重ね、集団を意識し、また集団を意識して友だちと伝え合うという両面が集団で育ち合うために大切であると感じている。そのために教師がまず、一人ひとりを尊重すること、また集団の中での個を尊重しつつ、友だちと育ち合うということを意識しておかなければならない。それぞれの子どもの実態を把握し、関係を細かに考えていくことが必要である。

課題としては、集団で育ち合うことに対しての教師の環境・援助を明らかにしていったが、反省も多い実践であった。また、環境構成の在り方があまり明らかになっていない。これから先も実践を重ね、よりよい集団で育ち合うことを支える教師のかかわりをさらに探っていきたい。

自分が認められ安心できる集団の中で、自分らしさを発揮しながら共に育ち合っていく心地よさを教師も共に感じながら日々を積み重ねていきたい。

<引用文献・参考文献>

- 1) 文部科学省：「幼稚園教育要領解説」, p. 15, 2008, フレーベル館.
- 2) 森上史朗・高杉自子・今井和子・後藤節美・田中泰行・渡辺英則：「保育の基本3 個と集団を生かす保育とは」, p. 216, 1997, フレーベル館.
- 3) 前掲書 2), p. 213.
- 4) 梅津八三・他編：「心理学事典」, p. 297, 1957, 平凡社.